

2003年フィールド調査「ヒアリング」まとめ

【第1回】2003年7月12日(土) 20:00～ / 民宿「山椒」

【第2回】2003年10月17日(金) 20:00～ / 民宿「山椒」

<ヒアリング協力者>

名前	年齢・生年	プロフィール	7/12	10/17
吉野かつみ(よしの・かつみ)	大正13年3月2日生	民宿「吉野家」、蕎麦打ち、コーラス		
林包芳(はやし・かねよし)	84歳	桶職人、炭焼き師		
林親男(はやし・ちかお)	62歳	元町議		
中島武(なかじま・たけし)	45歳	民宿「ゆきわり荘」、ナチュラリスト		
阿部惣一郎(あべ・そういちろう)	72歳	かやぶき職人、民宿「樹林(きりん)」		
高田保(たかだ・たもつ)	70歳(昭和9年生)	民宿「山椒」、1000坪の畑		

<ヒアリングのまとめと確認事項>

項目	ヒアリング内容	
カヤ場	<p>平井出集落にもカヤ場がある。広さは上の原の3分の1くらいだったが、林包芳さんの父が茅葺き職人で、ここのカヤを使っていた。</p> <p>カヤ場は、各集落ごとに持っていた。</p> <p>【町史】この部落(藤原)には、方一里といわれる広大な「上の原」があるし、ほかに、宝台樹山、樺山その他にカヤバがある。尤も宝台樹山の七割は国有林に編入されているので、採草組合をつくり、採草地として認めてもらっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各集落のカヤ場の位置、面積
植生・生物	<p>カヤ場にはかつて、コマユミやハナヒリノキなどの低木は生えていなかった。</p> <p>ハギは野焼きをしても絶えてしまうことはない。</p> <p>【75年・群馬県企画部環境保全課調査】群馬県に生息するチョウとガのうち72%の種類をこの地区で見ることができた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> カヤ刈りをしていった頃のカヤバ場の様子の追加確認(春・夏・秋・冬を思い出してもらって)
カヤを刈る	<p>屋根の葺き替え予定がある家は、前もって区長へ申し込んでおく。区長はこれを調整する。だいたいカヤを必要とする家は分か</p>	<ul style="list-style-type: none"> カヤの「口開け」の決め方、伝え方など カヤ刈りの服装

	<p>っていて、暗黙のうちに了解済みだった。カヤ刈りの作業行程は「カヤを刈る」、「貯める」、「出す」、「焼く」というサイクル。カヤ刈りは10月の末ごろ。カヤの「花」が散るころが刈り時。</p> <p>カヤ刈りや屋根のカヤぶきは「エイッコ」でやった。「総出」とか「無尽」とかいい、カヤが必要な家の仕事を地区総出で手伝った。カヤ刈りのお礼の「まかない」にはキノコ汁なんかを出した。</p> <p>エイッコも、中区は全部の家ではなく、親類の家などが中心に手伝った。</p> <p>茅葺き用の茅刈りは、まず地区全部で刈った。それぞれの家の人が「何把」刈ったかを報告させ、合計を出して、それで屋根葺きに足らなければ、茅を必要とする家の親戚が後で刈った。</p> <p>カヤ刈りは、日に50坪、5000把くらいを刈った。</p> <p>刈ったカヤは5把ずつ立てて乾かしておき、11月はじめごろ「マルニウ」にした。これは、まん中に丸太を立てて、そのまわりにカヤを積んでいくもの。</p> <p>カヤ出しは11月末。1回に100把ぐらいを雪ぞりに乗せて運んだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ カヤ刈りの時にはならない約束事など ・ エイッコは1軒に1人？ ・ その他エイッコの約束事など ・ 子どもたちの仕事は？ ・ 雪ぞりの構造 ・ カヤ出しはカヤが必要な家がする？
野焼き	<p>野焼きは、カヤのためだけでなく、ワラビのためにも必要だった。</p> <p>ハギは野焼きをしても絶えてしまうことはない。</p> <p>野焼きの時期は雪解け後。「雪の消え間」を焼く。まわりには雪が残っているので、類焼の心配がない。</p> <p>野焼きは各自でやった。火をつけたあと、ずっと見守っているということはない。火をつけて帰ってしまう人もいた。</p> <p>火は直接カヤ原につけた。斜面の上の方からということには特になかった。</p> <p>山とカヤ原のあいだにある「火防線」は、戦後に植林がおこなわれたためにつくら</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野焼きに際しての約束事、禁止事項、注意事項など ・ 野焼きの効果（再確認） ・ 雪解け後では湿っていて燃えにくいことはなかったか ・ 野焼きは個人がやった？カヤを必要とする家？ ・ 野焼きの時の道具一式 ・ 火防線の位置の再確認

	<p>れたもの。 町には「火入れ条例」がある。 ワラビ採りの人が火を入れて、「火事」を起こしたことがある。 平成8年、バーベキューからの失火があった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 火入れ条例のコピー ・ いつ頃？
カヤ場の歴史	<p>昭和18年ごろ、「義勇軍」がカヤ原を畑にして、ジャガイモやカライモ(キクイモ)を作った。キクイモは焼酎の原料。これらは連作でダメになった。 キャベツもやってみたがだめだった。キャベツはその後、個人でもカヤ原を借りて作ったりしたがやはりだめだった。 義勇軍でカヤ原に残った人がいた。「カライモじいさん」と呼ばれていて、茅葺きの小屋に住んでいた。 戦後(昭和22、3年ごろ) 学校林などのため、山側にカラマツの植林をした。そのため、植林地とのあいだに「火防線」が作られた。 30年ほど前(1970年代)に「国土開発」がカヤ原を購入。20年前にゴルフ場にした。上ノ原区の共有林 町有林 国土開発 ゴルフ場という歴史。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場所の確認。上の原すべてを畑にした？ ・ これも義勇軍？ ・ 地図を使って位置を再確認 ・ 植林は総出？ ・ 歴史の詳細の確認(年など) ・ 過去の地図、航空写真などの入手 ・ 町有へ編入する時、議論などはなかったか ・ 十郎太沢付近が残った経緯の再確認 ・ 藤原地区の人たちは、現在の十郎太沢のカヤ場に対してどんな意識を持っているのか。町有というより入会地、共有地という思いが残っている？
カヤ場の産物など	<p>山の口明けには、カヤ以外に「ハギの口明け」というのがあった。カヤのあいだにハギが混じって生えているが、特にハギだけの口明けが決められていた。ハギの葉は馬の飼料に、茎は炭俵のフタにした。 野焼きをするといいワラビがでた。特に</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハギの口明けの時期は？ ・ ハギを刈る場所は、各家で決まっていた？ ・ ハギそのものを販売することはあった？ ・ その他、ハギ採りに関する約束事など ・ ワラビ採りに関する約束事な

	<p>「ワラビ粉」は大切な現金収入源だった。「機織り」や「番傘」の糊(のり)の原料として、桐生や京都へ出荷した。ワラビ粉は各家でつくり、うわずみの黒い部分は「焼き餅」などにして食べた。</p> <p>ワラビ粉以外の産業としては、炭焼き、カイコ、クズ(根を臼ですりつぶす)があった。</p> <p>学校に通っていたころ、学校の掃除に使うために箒を作って持っていった。コマユミ(ホウキの木)、ハギ、ドウダンツツジなどで箒を作った。</p> <p>「草箒(くさぼうき)」といって、ホウキグサで作る箒があった。これは上等で、土間用だった。</p> <p>カンジキはジシャの木(アブラチャン)で作った。木は温泉の湯に浸して曲げた。</p> <p>クルミはボタ(ゴヘイ餅のたれ)を作るときに使った。</p>	<p>ど</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワラビ採りは各家でまったく自由に？採る場所などが決まっていた？ ・ ワラビ採りの時期は？女性の仕事？ ・ ワラビ販売の最盛期はいつ頃？
カヤを葺く	<p>藤原には竹がない。代わりに、マンサク、ナラ、クリ、サルスベリ(リョウブ)、ヤマウルシなどのまっすぐなものを、カヤの押さえ(オシブチ)に使った。</p> <p>葺いたカヤの仕舞いをそろえる「ツチ」は、スギを。柔らかい木なのでカヤと相性がいい。</p> <p>カヤのいちばん下に「アサ殻」を敷いた。</p> <p>昭和24年ごろ、林惣一郎さんが最初にもらった日当は40円だった。同じ時期、親方は250円もらっていた。</p> <p>昭和24年ごろ、屋根葺きは1軒あたり「50坪、50人工」とされていた。これで1万5000円かかった。</p> <p>屋根を葺くするには、カヤが5000束くらい必要だった。</p> <p>昭和35年ごろ葺き替えたのが最後か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 茅葺き作業の始めから終わりまでの様子を確認
その他	湯ノ小屋の温泉は、麻の皮を剥くためにも	<ul style="list-style-type: none"> ・ 麻の栽培は戦後も可能だった

	<p>使った。刈り取った麻を長いまま持って行って、国有林（営林署）のトロッコで運んだ。昭和20年代後半～30年代初めごろの話だ。</p> <p>木材の相場がよくて営林署の景気がいいときは、それはにぎやかだった。戦後はじめてトラックを導入したのも営林署だった。</p> <p>林親男さんがトラックを買ったのは昭和30年。トヨタの1トン車。藤原で4台目の自動車だった。薪、炭、木材など何でも運んだ。人も運んだ。善光寺参りに行く人を運んだし、新潟へも頼まれて人を荷台に乗せていった。</p> <p>ブナ林は標高650メートルくらいから出てくる。「ハマセン」のベニヤ工場があって、そこへ切り出したブナを運んだ。その後ブナをチップにするようになったが、その時はもう営林署が落ち目になってきた頃だ。</p> <p>藤原では焼き畑のことを「カンノ」といった。</p> <p>干し草のことを「カッポシ」という。肥草（ひくさ）にするカッポシは夏、梅雨が明けるまでに刈った。</p>	<p>た？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国有林、営林署と藤原地区との関係 ・ 藤原地区の森林所有の様子（国有林、個人所有林面積など） ・ 個人の山の利用の様子 ・ 薪炭用の雑木の確保の仕方。共有林、国有林、私有林から？ ・ 藤原の樹木の地元名 ・ カンノはいつ頃まであったか、どこにあったか、何を栽培したか

2003年フィールド調査「植生調査」まとめ

【第1回】2003年7月13日(日)ミズナラ林の「毎木調査」

【第2回】2003年9月14日(土)～15日(日)カヤ場の「概況踏査」

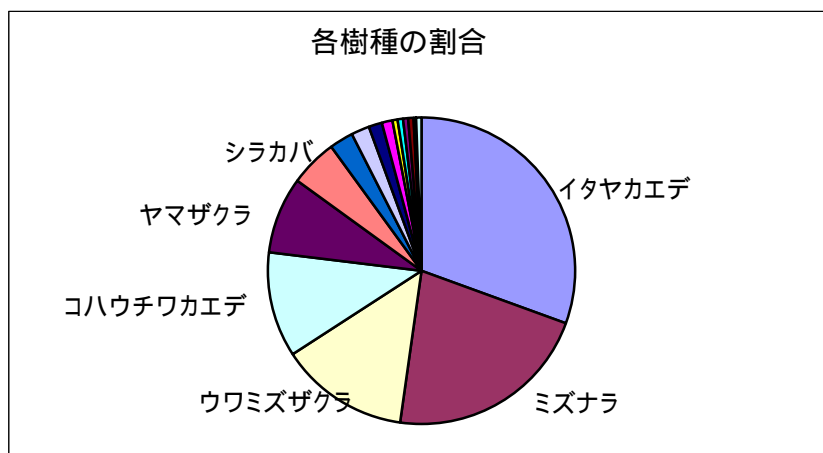
【第3回】2003年10月18日(土)～19日(日)カヤ場の「植生調査」「バイオマス調査」

<ミズナラ林の様子...7月13日調査>

林の中に10m×10mの区画を3つ作り、それぞれで「毎木調査」(一本一本の木について、種類、高さ、直径などを調べること)をおこないました。以下は3区画のまとめです。

毎木調査集計(3区画の合計)

樹種名	本数	平均樹高 m	平均胸高直径 cm	胸高断面積合計		%	メ	モ
	本/300m ²			cm ²				
イタヤカエデ	18	13.5	37.6	2,611	30.6			
ミズナラ	9	11.2	28.2	1,843	21.6			
ウワミズザクラ	32	5.6	9.6	1,157	13.6	枯れかけ1を含む		
コハウチワカエデ	26	3.5	5.8	936	11.0			
ヤマザクラ	5	9.5	12.9	687	8.1			
シラカバ	1	18.0	74.7	444	5.2			
ミズキ	1	10.0	16.6	215	2.5			
バッコヤナギ	2	6.3	10.1	161	1.9			
ハリギリ	1	7.5	11.8	110	1.3			
タニウツギ	5	3.0	4.5	90	1.1			
ヤマグワ	2	2.5	6.4	64	0.8			
ヤマウルシ	4	2.0	3.9	50	0.6			
イロハカエデ	9	4.1	7.8	48	0.6			
オオバクロモジ	10	2.0	2.2	39	0.5			
リョウブ	2	2.0	2.9	14	0.2			
ミヤマイボタ	2	2.0	2.4	9	0.1			
ヒトツバカエデ	1	2.0	3.0	1	0.0			
枯れていたもの	3	1.8	4.0	45	0.5			
合計	133			8,524	100.0			



コメント...ここで大切な数字は「胸高断面積合計」。1本1本の木に対して調べた太さから幹の「断面積」を求め、それぞれの樹種について合計を求めたもの。数字が大きいほど、調査区で目立つ種類ということになる。たった300m²の調査なので正確なことはわからないが、だいたいこんなことが言えそうだ。

- ・ イタヤカエデ（アカイタヤ）、ミズナラ、ウワミズザクラ、コハウチワカエデという4種類で、調査区の4分の3の断面積を占めている。
- ・ 特に背の高いイタヤカエデ（アカイタヤ）とミズナラの割合が大きいので、調査区の林はとりあえず、「ミズナラ-アカイタヤ林」としておきたい。
- ・ ある時期にこの場所は伐採されたと思われる。その時、よその場所からいくつかの樹木が入り込んできた。シラカバ、ミズキ、バッコヤナギ、タニウツギ、ヤマグワ、ヤマウルシ、ミヤマイボタがそうだと考えられる。
- ・ 一方、ミズナラ、カエデ類、サクラ類は、伐採の前からそこに生えていたと考えられ、伐採された後、切り株から芽を出したものが多い。
- ・ 低木にオオバクロモジがある。この木はブナ林にセットででてくることが多いので、調査区はやがてブナ林に移っていくと考えられる。現時点では、「ミズナラ林一步手前の段階」で、ブナ林へは「2、3歩手前」の段階だろうか。

今後の調査など

- ・ 300m²の調査では少なすぎる。できるだけ多くの場所で「毎木調査」が必要。
- ・ この場所は、実際いつ伐採されたのだろうか？ ヒアリングのほか、木を伐採して年輪を数えることで知ることができる。木を切ることがあったら、「木の種類」と「年輪の数」は必ず記録しておきたい。
- ・ どんな使われ方をしていたのか？ ヒアリングで「林の歴史」を確認したい。

<カヤ場の概況...9月14～15日調査>

(別紙参照)

踏査でわかったこと

- ・ カヤ場はおおよそ、ススキが多いところ、ススキに低木（タニウツギ、バッコヤナギなど）が混じっているところ、ススキに低木と高木（シラカバ、ミズナラなど）が混じっているところ、の3カ所に分けられる。「遷移」が進んで「森林化」が進み、本来のススキ草原は少なくなっている。
- ・ ススキ草原の植物「ナンバンギセル」を発見。ナンバンギセルはススキなどの根に寄生する植物。ススキ草原の減少とともに貴重な植物になってしまった。ススキ草原の再生で増やせる可能性がある。
- ・ かつての「火防線」らしき場所があった。仮小屋の前にあるスギの木は、「火防線」に沿って植えられているようだ。
- ・ 十郎太沢の南側、ミズナラ林との境に沿って人工的な「道」のようなものが残っていた。幅は約5メートル。現在は木が生えているが、これも「火防線」の可能性が大きい。

<カヤ場の植生・バイオマス調査...10月19日調査>

調査区について

- ・ テントのところから仮小屋のところまでのあいだの、ススキが比較的密生している地区に、1 m × 1 mの区画を10カ所作った。ほぼ一直線に並んでいる。

調査の内容

- ・ 各区画について、(1) ススキの被度 (どれくらいの面積を占めているか) (2) ススキの高さ (その区画で一番高いもの)、(3) その他どんな植物がどれくらい生えているか (植物の種類・被度・本数など) を調べた。
- ・ 各区画の植物を根際から刈り取って(4) ススキの根元直径 (10本のサンプル調査) を測り、完全に乾燥 (熱風乾燥) した後、(5) ススキとその他の植物に分けてそれぞれの重さ (乾重量) を量りました。

調査の結果

【植物の種類について】

- ・ 10 m²の調査区全体で、36種類の植物が見られた。調査時期が異なれば種類はもっと増えると思われるが、いずれにしても野焼きをしたらどうなるか。植物数は増えるのか減るのか、植物の種類はどう変わるのかなどが注目点。
- ・ 全区画に共通して見られる植物は、ススキ、ヤマハギ、ワラビ、ヨモギ、スミレ類、ヤブマメ、ヘビイチゴなど。
- ・ 10の調査区のうち、2カ所以上で見られた植物は19種類。秋の七草のオミナエシが3カ所で見られたのは吉報 (ススキ草原の再生で増やせそうだ)。
- ・ 木本植物のコマユミが2カ所に出現。遷移が進みつつあるシグナルか。

【バイオマス量について】

- ・ 調査区Aの方が調査区Bに比べ、「ススキは背が高くて太く、たくさん生えている (被度と乾重量が大きい)」、「見られる植物の数が多い」という傾向があった。具体的には、ススキの1 m²当たりの乾重量は、調査区Aは調査区Bの約2倍、太さも約1.6倍。ススキ以外の植物についても、1 m²当たりの乾重量は、調査区Aは調査区Bの約1.3倍あった。
- ・ ススキの量が最も多かったのは調査区 。高さも一番で、太さもそこそこあった。刈り取りや野焼きなどの管理をすることによって、ススキの割合が増えれば理想的な区画か。
- ・ ススキの乾重量は、調査区全部の平均で740 g / m²。上の原10 haのカヤ原に換算すると、74 tのススキ量になる。これは2 tトラック37台分。
- ・ 太いススキが生えているところはススキの量 (乾重量) も大きい、という傾向があった (当たり前?)。なお調査区 でススキ以外の植物の量が多いのは、ヤマハギがたくさん混じっていたからのようだ。

調査区で見られた植物一覧(10月19日調査)

植物名	調査区(A) ~ / 下部				調査区(B) ~ / 上部			
	高さ	被度	本数/m ²	出現調査区数	高さ	被度	本数/m ²	出現調査区数
ススキ	242 cm	67%	・	6	214 cm	55%	・	4
ヤマハギ			3.3	3			5.3	3
ヨモギ			3.3	4			5.0	3
ワラビ			2.0	1			1.7	3
トリアシショウマ			4.2	5			・	・
オカトラノオ			4.2	5			・	・
スマレ類(2種)			3.8	4			1.0	1
ナワシロイチゴ			2.5	2			・	・
ヤブマメ			1.5	2			2.0	1
コマユミ			1.0	2			・	・
シシウド			1.0	2			・	・
アカソ			8.0	1			・	・
ゲンノショウコ			8.0	1			・	・
フキ			4.0	1			・	・
ヘビイチゴ			3.0	1			1.0	1
フタリシズカ			3.0	1			・	・
ヒキオコシ			2.0	1			・	・
ツリフネソウ			2.0	1			・	・
キンポウゲ科の1種			2.0	1			・	・
オオヤマフスマ?			1.0	1			・	・
カラマツソウ			1.0	1			・	・
カセンソウ			1.0	1			2.3	3
クマイチゴ			1.0	1			・	・
コウゾリナ			1.0	1			・	・
トネアザミ			1.0	1			・	・
ミツバツチグリ			1.0	1			・	・
フユノハナワラビ			1.0	1			・	・
ノコンギク			・	・			4.7	3
オミナエシ			・	・			2.3	3
ミツバツチグリ			・	・			1.7	3
ニガナ			・	・			1.3	3
オトコヨモギ			・	・			3.5	2
ヨツバヒヨドリ			・	・			1.0	2
ノハラアザミ			・	・			1.0	1
ナツトウダイ			・	・			1.0	1

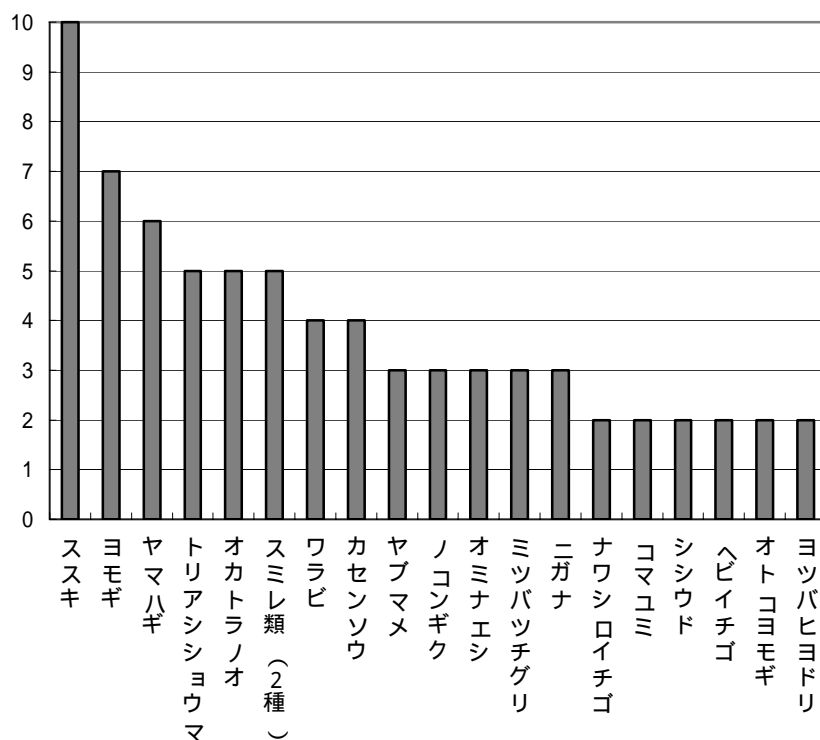
各調査区のまとめ

調査区	ススキ				その他	出現植物数
	被度%	高さcm	根元直径mm	乾重量g	乾重量g	
	80	225	4.9	944	83	8
	60	230	5.5	826	73	10
	70	230	5.7	991	183	8
	60	240	4.6	783	57	7
	70	260	5.0	864	82	10
	70	265	5.2	1,150	143	9
~	68	242	5.2	926	104	28(4.7/m ²)
	40	245	3.4	373	194	11
	40	213	3.2	359	58	9
	60	197	3.1	431	41	9
	70	202	3.6	678	17	8
~	53	214	3.3	460	78	15(3.8/m ²)
調査区全体	62	231	4.4	740	93	36(3.6/m ²)

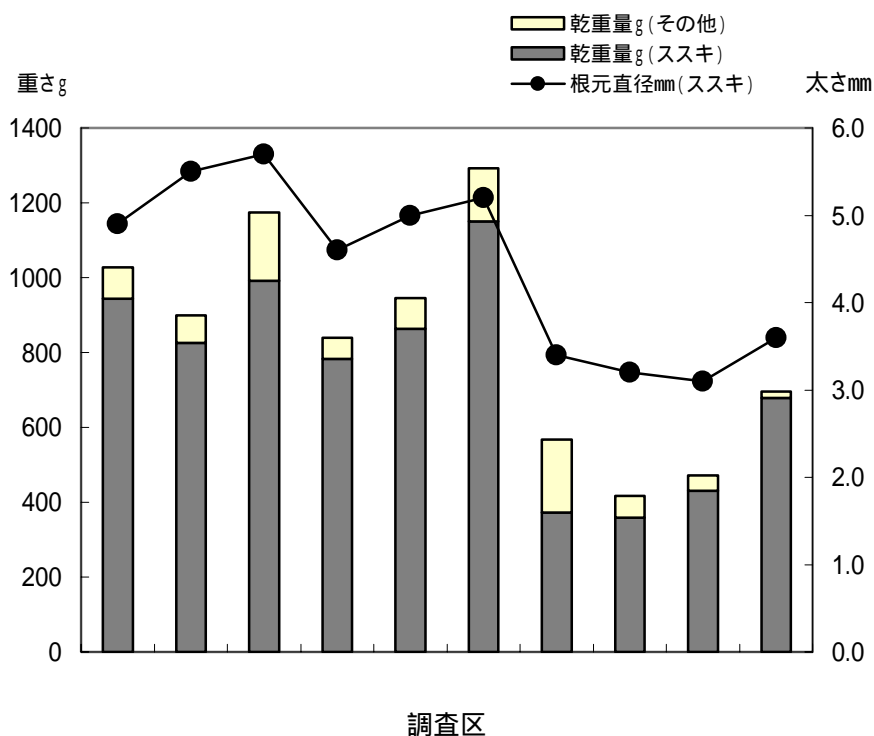
ススキの「高さ」は、その調査区でもっとも背の高いもの

ススキの「根元直径」は、各調査区10本の平均値

調査区数 2カ所以上の調査区で見られた植物



各調査区の植物の量(乾重量)とススキの太さ(根元直径)



<茅場について必要な今後の調査など>

茅場全体の様子をより正確に把握して地図にすること

- ・ 「森林化」の様子を把握する追加調査が必要。

茅場(ススキ草原)の生き物調べ(チョウなどの昆虫、野鳥など)

- ・ 特にチョウを含む昆虫類の調査は重要。

茅場の四季の記録・生き物リストづくり

- ・ 写真などによる映像記録
- ・ 「花ごよみ」「虫ごよみ」「鳥ごよみ」などの作成
- ・ 植物、虫、鳥、ほ乳類、キノコなどの「生き物リスト」作成

茅場の利用・管理計画づくり

- ・ 茅場はこのまま放置すれば「森林」にもどっていきます。これを「ススキ草原」として維持していくのにいちばんいい方法は「火入れ」です。10ヘクタール全部をススキ草原として管理・利用していくのか...。全体のランドデザインが必要。
- ・ 茅場の資源(ススキ、ハギ、ワラビなど)をどう利用していくのか。茅場を育てるだけでなく、資源の使い道や使う仕組みを考えていく必要がある。
- ・ 散策路、管理道路が必要。どんなルートがいいか、要検討。そして「道づくり」を。